

B-1. 指導上の工夫 詳細

伝え合う力を高めるために、二年間を通して重点をおき取り組んだのは以下の①～⑤である。
そのうちレジュメで取り上げたのは、①～④についてである。

- ① 子ども自身が学びの「必要感」と明確な「めあて」を持つことができる単元の導入を作る。
- ② 単元の目標にせまるため、基礎基本を学ぶ場や学び方を習得する場、思考を深める場を設定する。
- ③ 相手や目的に応じた言語活動を取り入れ、学びが生かされた実感、達成感のある単元のゴールを作る。
- ④ 自己評価（ノートへのふり返り）の活用。【学習日記】

何のために？

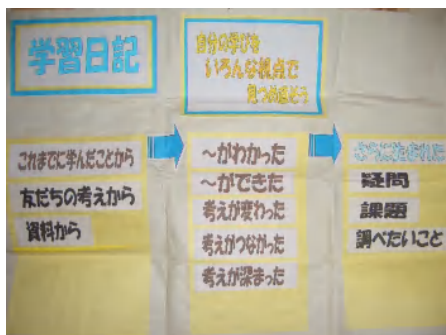
- ・一人一人の子どもの実態を把握し、自己評価力を含めた学力向上を図る。
- ・教師の授業改善に役立てる。
- ・「教師と子ども」、「子どもたち同士」が学びの共有をする。

- ⑤ 相互評価の場やアドバイスし合う場を設定する。

（自分のよさや課題、変容を知り、より確かな自己評価につなげていく。）

子どもの「育ち」が見えるように実践することを共通理解し、学校全体で自己評価（ノートでの記述によるふり返り）に取り組んでいる。各学級で様々な呼び名がついているが、自分は「学習日記」と呼び、一時間の授業の最後にほぼ毎時間、取り組んできた。（写真①）

子どもの思いを大事にし、「書かせる」のではなく「書きたくなる」授業作り、つまり「誰かに伝えたいような、わかるできる喜びのある授業」をめざして全校で取り組んできた結果、子どもたちは書くことに抵抗がなく、短時間で書くことができるようになっている。（写真②）



写真① 学習日記の教室掲示

子どもと一緒に視点を増やしてきた。



写真② 学習日記を書く姿。

1時間の最後に書くことが定着している。
子どもたちは自分の学びを短時間でふり返ることができるようになっている。

また学習日記の育ちをどう見取るのか、視点を持ちながら学習を進めた。（資料B）

基礎となる学力の定着を見るだけでなく、「友だちと伝え合い・かわり合いながら学んでいるか」「次時への見通しを持ちながら意欲を持って学んでいるか」などの単元テストでは評価しにくい力を見取る方法として活用した。